



海神の裔
豊田有恒
集英社（文庫）
（2 / 25刊・¥300）

四十八年前に、歴史関係の雑誌で主に発表された、計八篇を収めている。ざっと分類してみると、伝説を題材にした「海神の裔」と「熊野伝説」、八百比丘尼の相對論的解釈「メトセラの裔」（以上は、現代もの）。古代史ものとして、天智帝の近江遷都と都の崩壊を、大友の皇子、大海人の皇子の二人の立場から描いた「大友の皇子、都落ち」と「近江京脱出」。『日出処の天子』や『落日の王子』などで話題を呼んだ時代、聖徳太子から大化の改新までを描く「倭王の伝説」と「入鹿暗殺」などなど。

作者独特の古代史解釈によって書かれた諸作品が面白い。はじめての古代史もの、中篇「倭王の末裔」（一九七〇）以来、一貫して姿勢は変わらず、その見方で通されている。あとかきで作者が記しているように、明確な史実に乏しく、解釈が比較的自由にできる古代史は、SFの手法が応用できる世界でもある。歴史は、ある意味で、事実より、解釈の積み重ねで出来上っている。視点を変えれば、全く別の歴史が浮かび出てくるのだ。そこに異世界ものに似た、驚きが生まれるのだらう。

（俊）